

岩橋千賀子さんのお話

本稿は「ちさと 第三号」（平成二十九年十一月一日発行）に掲載されました。ちさと会から同誌十部のご寄贈を頂き、十一月十一日の千里山会総会でお配りしました。本稿を読まれた会員の方から千里山の大事な記録であり、会員の皆様全てに読んで頂けるよう会誌「千里山」に転載して欲しいとの希望の声上がり、「ちさと会」と九回生岩橋千賀子さん（本会会友・本会員飯島泰蔵先生の幼なじみ）にお願いし、お許しを頂きました。

本稿は録音テープから二十六回生瀧梢さんが原稿を起こされました。転載に当たり、ごく一部の訂正と岩橋さんからの再度の加筆変更を行いました。大部分は原文のままとなっております。（編集部注記）

昨年春、千里第三小学校校長からちさと会代表の山本さんに、先生方に戦前や戦争中の千里山の様子を話してほしいという依頼がありました。

六月十六日、堀田さん作成のパワーポイントでの映像資料を携えて、戦前の千里山の話が御出来になる山本平八郎さん（千二小昭和19年卒）が映像の説明を主にされ、岩橋千賀子さん（千二小昭和

13年卒）がまとまったお話をされました。

とりわけ、岩橋さんは、是非若い先生方にお伝えしておきたいと貴重なお話を、歴史年表を参考にしながら、力のこもったお声で話されました。後日、話し忘れられたことも加筆して、以下にまとめました。

私は大正十四年（一九二五年）に生まれ、生まれて間もなく、開発されたばかりの千里山に転居してきました。伯父が日本窒素に勤めており、信越窒素肥料㈱開業にあたって九州から移動するのに、途中で休憩できる地にと、また皆が集まって憩える場所にと、千里山に居を定め、弟である私の父（当時大阪市内在住）が建築の監督の任を負い、移転してきました。最初の家は現在の西五丁目から南千里に下りていく、当時の千里山住宅の一番高いところがありました。千里山の北の端、ミカン畑を通り過ぎた人里離れた一軒家でした。

小学校四年生の時、今も住んで居る千里山西一丁目の家に移りました。今度は千里山の南の端、生駒の山並みを眺め、大阪城や淀川の花火も家からたのしめていたのです。昭和二十年三月十三日の

大阪の空襲の折、この家から、雨あられと降る焼夷弾攻撃を見ることになるとは・・・。

当時、天六からの電車は豊津でほとんどの人がおり、終点の千里山までの人はごくわずか、駅に立つと、西側は開発されており、駐在所の上に少し商店が並び、登って行くと中央に噴水、まわりには郵便局、住宅会社の事務所などがあり、扇形に開かれた宅地には赤い瓦の半洋風めいた住宅が集まっており、空き地も多いでした。駅東側は見渡す限りの田園風景で、田圃が並び、一本のあぜ道の奥に、山に抱かれた小学校が建っているのみでした。子供の足には学校は遠かったのです。

昭和初期の千里山は、関東大震災（一九二三年）後、関東を離れ、関西の発展を見据えて意気込んできた人たちが多く、標準語の聞こえる町でした。当時の建売住宅には浴室が無く、お風呂屋さんではいわゆる大阪弁で無い言葉が飛び交っていたようです。住民は若く、著名人も多くおられました。教育にしつげに情熱が注がれていました。

買い物も現金払いでなくつけで買うことも多く、また坂道が多い町なので、御用聞きが来て注文を

や切り立った崖が遊び場で、家からスコップを持ち出し、陣地、滑り台作りなどしながら日暮れまで砂まみれになって遊びました。

一時期、親の手編みのセーター（紺地で、胸に男子は灰色女子はえんじ色の二本線）が制服に定められ、私たちの卒業写真はその姿でしたが、まもなく物資不足のため無くなりました。

千里山遊園地（現関大幼稚園、関大一中・一高の周辺）の菊人形、ホタル狩り、映画、ロバに乗ったことなど思い出します。

ここで室戸台風のこと（一九三四年九月二十一日）のことを思い出しました。当時はまだ正確な天気予報はなく、少し強いか・・・と思った程度の風が、登校まもなくますます強くなって来て校舎が揺れ出しました。全員講堂に避難し、ガラスが割れてはいけなさと中央にかたまり、恐る恐る窓の外を見ながら震えていました。豊津にある豊津小学校は田圃の真中に会って遮るものが無かったため倒壊し、その下敷きになって先生と児童が亡くなりました。子供たちを庇って亡くなられた

聞き、後から配達するやり方でした。小さい新興住宅地での皆の信用があったからこそできたのでしょう。

子供たちももちろん現金など持って遊んでいるわけではなく、ある時自転車に乗ったアイスキャンデー屋が第一噴水で子供たちにはアイスキャンデーを売ろうとしているのを見つけたあるお母さんが「この町では子供には現金は持たせていません。どうぞお引き取りを」と言ったという話が残っています。買い食いはもちろん食べながら歩く習慣ありませんでした。

千里第二小学校は昔からあった佐井寺村の子供たちと新興郊外住宅地の子供たちとで構成されました。佐井寺村からの子供たちは小さい時から親の農業を手伝い、たくましい子供が多かったと思います。ある時、小学校からの帰り道で、佐井寺地区の同級生が牛が引く荷車を上手に扱っているのを見てすごいなと思ったものです。勉強は千里山住宅組、スポーツは佐井寺組が優れており、ため池での魚釣り、ワラビ採り、野草の見わけ方などは教えてもらい、千里山周辺の未開発の空地

先生の話が胸を打ち、その姿を称える教育塔が建てられ、大阪城前の公園に現在も見られます。

千里山住宅には比較的若い親たちが多かったからでしょう。子供たちへの教育も熱心でした。かくいう私も千二小を卒業して大阪市内の清水谷女学校へ進学しました。当時は郡部（千里山は三島郡千里村）から大阪市内の女学校に入れた例も少なく、入りにくいところを親が熱心に私の成績を見てもらえるよう方法を考えてくれ、清水谷女学校に入学することができました。

昭和十六年（一九四一年）小学校は国民学校に改称され、十二月八日真珠湾攻撃から太平洋戦争に突入していききました。昭和十八年私が女学校を卒業して阪急岡本にあった専門学校（現神戸薬大）に入ってから以降、戦局が怪しくなまってまいりました。私の女学校の五年間は勤労奉仕はあったものの普通に学習ができましたが、私より後輩は勤労員でほとんど勉強はできなかったようです。金属類供出でお寺の釣鐘も姿を消し、スカート、着物がモンペ姿に、男子はゲートルを巻いて・

・となり防空頭巾、非常袋も用意しました。お米は一日一人二合三勺のみ、砂糖・油・醤油すべて配給、玄米なので一升瓶に少し入れて細い棒でゴシゴシ精米し、すいとん、雑炊が主食、油の搾りかすまで交ってきました。食べられるものは何でも工夫して食べました。サツマイモのつるも食べました。空地に自家菜園を作り、衣類を持って農家へお米と交換したのもその頃でした。食を預かる主婦は大変だったことでしょう。

家の表には防火用水、砂袋、バケツ、火叩きを常備し、窓ガラスには白い紙で目張りをし、厚手のカーテン、電灯には長いカバーをかけ明かりが漏れないようにしました。防空演習、救護訓練、バケツリレーをして消火訓練、防空壕掘りもしました。

昭和十八年、文系の学徒徴兵猶予が解かれ、出陣学徒壮行会が明治神宮外苑競技場で行われ、神戸でも中央公園で行われました。学生帽、学生服に鉄砲を担った学生の行進には涙しました。将来の大きな夢、希望を持った学徒がどんな気持で行進に参加していたか、また、命を捧げることをご

う受け取っていたのか・・・、胸が痛みます。皆、戦争の第一線に送られたようです。

昭和二十年に入ってから関西もしばしばアメリカ軍の空襲が激しく、三月十三日の大阪大空襲の後、梅田から難波辺りまで蔵以外何も無い景色になったのを覚えております。神戸も戦禍ひどく、六月ごろ、登校後すぐにサイレンが鳴り、アメリカ軍の焼夷弾と艦載機による機銃掃射攻撃で学校の裏山の避難所に間に合わなかった多くの人たちが犠牲になっていくのを目の当たりに見ました。空襲が終わった後、先生に言われて助かりそうな人を担架に乗せて運ぶ作業をしました。始めは死体や傷ついた人たちを見て嘔吐く思いでしたが、作業をしているとそれも無くなり、ただ少しでも助かりそうな人を運ぶことで必死でした。昼過ぎまで活動し、帰路は歩いて千里山迄帰りました。空襲の後には煤を含んだ黒い雨が降るのです。

昭和二十年（一九四五年）八月、二個の原子爆弾が投下され、ソ連が対日宣戦布告をし、ようやく十五日に終戦となりました。天皇陛下の玉音放送

は雑音が多く聞き取りにくかったのですが、何となく涙が流れました。九月二十七日、天皇（昭和天皇）が初めてマツカーサー元帥を訪問され、「私は、国民が戦争遂行にあたって、政治・軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身をあなたの代表する諸国の採決に委ねるためにお訪ねしました」との主旨を発言され、マツカーサーの胸を打った、と伝えられています。

戦争中、戦後と大変な時、お互いが助け合い、並大抵でない忍耐と努力を積み重ねてきました。そして、多くの人の尊い命の犠牲の上に今日があること、どんなに感謝してもしきれません。物事を合理的に考えるのも大切ですが、長い間積み重ねてきた日本の美風、電灯、文化を大切にし、知恵を絞り、工夫を重ね、物を大切に：ひととき戦時時を振り返っていただきたいものです。

戦争は二度としてはいけません。でも、果たして今の体制で、今の考え方で、今の体力で本当の幸福が来るだろうか？などと、いろいろ考えてしまう現在です。

最後に、岩橋さんは広島で爆心地から一・七キロの地で被爆された友人のおひとりのお手紙を読まれて話を終られました。その友人は被爆のことをかつて一度も話されたことが無かったのですが、黙っていても伝わらないと思い、辛い気持ちを乗り越えて手紙を書かれたとの事でした。その手紙を紹介します。

語りつく被爆体験

死者のため惚けてはならぬ原爆忌 歌ひつくせぬわが思ひあり

被爆者であることを口にするまでには長い沈黙の時があった。それはあの凄惨な光景を一日も早く脳裡から消し去ってしまったことと、あの当時世の中の特別な視線を感じていたからであった。

稲妻にも怯えしいくとせ ちちははに訣れを告ぐる夢ばかり見き

新婚まもない私の家は爆心から一・七キロメートル

ルの広島市観音本町にあった。あの八月六日八時十五分、朝の掃除を終わってバケツを持ち階段を下りた瞬間、ドーンという強い衝撃に身は何メートル吹っ飛ばされたのだろう。爆風で家は壊滅し、意識を失ってしまった。その時、隣家の少女が大声で呼び覚まし、白いズックの靴がとんできたのである。胸を病んで居られた美しい天使のような少女であった。お元気で居られるだろうか。その靴がよく私の足に合ったものだと思議に思う。第一の救い主である。

気が付くと髪は逆立ち、口からは血があふれ、ブラウスは真っ赤であった。顔面の切り傷、ガラスの破片は刺さっていたが手足は動く。生きていると思った。それからは火を遁れてどこをどう走っているかわからない。黒い群像の中にあつた。ずりりとむけた皮膚を垂れて水、水と幽霊のようにさまよう人、祈りながら死んでゆく人、子の名を呼ぶ足の無い母、六十余年経ても幻にはならないのである。

気狂ひて灰燼の地さまよふ裸身あり この高笑ひ天にとどくや

黒い雨が降って来て動けなくなった。その時通りがかつた軍人が奇しくも夫の知人N氏で、救われたのであった。この方にお逢いしなかつたら私は此処で果てていたであろう。

井ノ口海岸近くの任地にあつた夫と七日ぶりに再会した。赤い大きな夕陽が海の彼方に沈んでいった。あれほど哀しい落日があつただろうか。その海の水で私は毎日傷を洗った。海岸には死者が並べられ、名札が順に立てられていった。近くの寺の庭にも瀕死の人がぎっしりとして、傷口をその傷の形通りに蛆が埋めて光っていた。月光は昨夜より青かつた。私は哭くことすら忘れ立ちつくした。

平成四年の春、それまでも踏めなかつた広島のをどうとう踏んだ。そして万感の祈りをこめて平和の鐘を撞いたのである。あついあつい泪があふれた。この土に、この青草に幾万人の血潮が滲んでいるのだ。私にはまだこの緑の中にも灰燼のあの日が消えていない。ああ、核兵器廃絶はいつの日であろうか、世界の平和はいつの日であろうか。

泣く声も出せず死にたる子らのため 思ひつきり哭く八月六日

「戦争は二度とあつてはならない。子供たちにもこの思いを是非伝えてほしい、」と岩橋さんは若い小学校の先生方に強く訴えられました。

(文責 瀧 梢)



岩橋千賀子さん近影(平成二十九年十二月)
「デイサービス」で筋トレ中

岩橋千賀子さんはこの程、自分史「千里が万里ありがたう」を校了されました。勿論幼い頃からこれまでの「想い出」を近親の方々、ご子孫様方、曾孫様方、近しいご親戚、友人方に残すために執筆されましたが、昔の千里山を生き生きと描写された貴重な記録でもあります。ご好意により千里山会にも何部かご寄贈頂いており、「是非読んでみたい」という希望者は事務局までお問い合わせ下さい。